

「勘違い」のロールプレイにおける談話分析

——日本人と中国人の謝罪の言語行動に着目して——

二 宮 喜代子

1. はじめに

多くの留学生は来日後、日本人とうまくコミュニケーションが図れないことに悩み、また違和感を抱きながら会話を続けることにストレスを感じている。その原因が語彙や文法など知識を中心とする日本語力の問題であると考えがちである。しかし、実際には言語運用の問題や社会的、文化的背景の相違などに起因することが少なくない。

一方、留学生とは反対の立場にある、中国に進出した日本企業関係者も中国人とのコミュニケーションに悩んでいる。現地での代表的な苦労話として、「明らかにミスがあっても相手は理屈や言い訳ばかり言って謝らない。自己主張が強すぎて、やりにくかった」という感想が多く聞かれる。また、インターネット上でも「謝る日本人、謝らない中国人」という文言で多くの情報が目に入る。

曲・林(1998)は、ある問題の事柄に対処する表現の仕方について、日本式的特徴は「相談」であり、中国人と欧米人の特徴は「弁明」ととし、「弁明」の結果は「しばしば話し合いの一方は他方を心服させたり、あるいは屈服させる」としている。確かに、「相談」しながら問題解決を図ってきた日本人からすると、中国人の「弁明」を「理屈ばかり言って」と快く思わなかった感想もあながち否定できない。

滝浦・大橋(2015:24)は「共同体を維持するためには争いが回避されなければならないし、不幸にしてそれが起きてしまったならば早急に解決しなければならない」とし、コミュニケーションの大きな目的の一つに「争いの回避と解決」があると述べている。さらに、家族や友人の間でも争いを回避しながら人間関係の維持を図っていることに言及している。

「争いを回避しながら人間関係の維持を図る」とき、人々は様々な行動で課題を遂行しようとする。「謝罪」の言語行動もその一つである。「謝罪」については多くの言説があり、「すぐに謝る日本人」「なかなか謝らない中国人」というステレオタイプも見聞きされる。

日本語教育の場では「謝罪」の表現として「すみません」「申し訳ありません」「ごめんなさい」が初級学習段階で既習だが、教科書から離れた現実のコミュニケーションではどのように「謝罪」の言語運用を行っているのだろうか。この点について、日本語母語話者である日本人大学生(以下、JS)と日本の大学で学んでいる中国人留学生(以下、CS)を対象に、「勘違い」場面における同国人同士の日本語によるロールプレイを通して、主に「謝罪」に関する言語行動の共通点と相違点を明らかにし、その特徴をまとめてみたい。

2. 先行研究

謝罪の言語行動については語用論、社会言語学、第二言語教育などの分野で多くの先行研究がなされている。平田(1998:45)は日本語教育における語用論の視点から、「陳謝」「謝罪」について日本人母語話者を対象に談話完成テスト(DCT=Discourse Completion Test)を行い、相手の年齢、地位、受け手との関係の親疎、心理的距離が表現や談話の流れに影響を及ぼしていることを明らかにしている。また、熊谷(2013)は社会言語学的なアプローチで、「謝罪」をフェイスワーク(facework)の視点で論じ、「行き違い」場面に見えた日本人の謝罪表現の繰り返し使用を対人行動の視点で「潤滑油」として位置付けている(同書:30-31)。さらに、Brown & Levinson(1987)の研究結果である「日本人は他言語の話者に比べて謝罪を頻繁に行うだけでなく、謝罪を述べる場面や謝罪表現の使い方が多言語の話者と異なること」を紹介し(同書:25)、日本語コミュニケーションにおける謝罪行為は「相互扶助的なフェイス保持パターンが隣接ペアのような影響力で相互行為を形づくっている」(同書:34)と述べている。

「謝罪」についての日中対照研究も数多く見られる。謝罪行為の差異については鄭(2006)が半構造的面接法を用いて事例研究を行い、「日本人は謝罪言葉の表明、中国人話者は言葉よりも実際の修復活動を重視する傾向がある」(同書:70)とその特徴をまとめている。王(2009)は先生と友人に対する謝罪表現の使用の差異を調査し、「慣用表現での謝罪」は親しい同等の相手には中国人と比較して日本人の方が何度も行っているという結果を示している。高橋(2012)はこれまでの日中の「謝罪」表現研究の問題点をまとめ、「謝罪」に関する日中間での認識の差異の所在を示している。一つには日中の定型表現「すみません」と「对不起」の多義性の有無にあるとし、さらに、「定型表現を使用する方略を取る」日本と「使用しないという方略を取る」中国とを比較して、両者の認識の差異はコミュニケーションの方略の差にあるとしている。

3. 研究の方法

本研究では「勘違い」場面におけるロールプレイ(role-play)の会話を言語資料とし、そこに見られた「謝罪」に関わる言語行動を分析する。ロールプレイは地方の私立大学に在籍しているJS 10名とCS 10名の計20名の調査協力者を対象に2012年10月に実施した。ロールカードは山内(2000)における「ユニット3 勘違い」を用いた。待ち合わせ時間を勘違いしたために互いに会うことができず、帰宅後に待ち合わせした友人に電話をするという場面設定である。「指導のポイント」によると、このユニットの目標は「コミュニケーションの行き違いの事後処理を、相手の気分を害することなく、スムーズにできるようにする」とされている。つまり、滝浦・大橋(2015)の「争いを回避しながら人間関係の維持を図る」、そのためにコミュニケーションを必要とするタスクである。このロールプレイの目標は事前には調査協力者に伝えていない。また、「指導のポイント」に記されている「謝る」「言い訳する」等に示されている表現も事前には示さなかった。

JS同士のペア、CS同士のペア各々5組が与えられたロールカードに従ってロールプレイを行った。この会話は調査協力者の許可のもとにICレコーダーで録音し、全て文字化して談話分析のための資料とした。文字化の際にはザトラウスキー(1993)とメイナード(1993)の文

字化の方法や記号を参考にした。(注1)

3-1 ロールカード

使用したロールカードを以下に示す。

ロールカードA

A：友達のBさんと待ち合わせをしていたので、3時に喫茶店に行きましたが、Bさんはいませんでした。1時間ぐらい待っていましたが、Bさんは来ませんでした。仕方がないから家に帰りましたが、腹が立っています。Bさんに電話をして、事情を聞いてください。

ロールカードB

B：約束どおり、2時に喫茶店に行きましたが、Aさんは来ていませんでした。40分ぐらい待っていましたが、Aさんが来なかったの、家に帰りました。帰って手帳を調べてみましたが、待ち合わせの時間は、やはり2時でした。

山内(2000:34)では「A：勘違いをして3時に行った人 B：約束どおり、2時に行った人」と設定されているが、ロールカードには勘違いをしたのがだれであったのかという責任の所在は示されていない。一般的には山内(2000:34)の設定どおり、「手帳の記録」に基づく情報を有するBが正しく、勘違いをしたのはAだと判断される。しかし、調査協力者にはロールカードのみを渡したことからAの勘違いとは捉えずに会話を進めるペアも存在した。この点に関しては、過った時刻をメモする可能性も考えられることから、勘違いをした人を「B」または「不明」のまま会話を進めていても本研究ではロールカードの誤読とは捉えない。

3-2 調査協力者の概要

<表1> 調査協力者の概要 (親疎関係 ◎大変親しい、○親しい、△特別親しくはない知り合い)

日本人学生 (JS)				中国人日本語学習者 (CS)						
談話No.	協力者	性別	親疎	談話No.	協力者	性別	親疎	滞日年数	日本語学習歴	日能試合合格級
談話1	JA	女	△	談話6	CA	女	△	1年6か月	4年	不明
	JB	男			CB	男		9年	10年	不明
談話2	JC	男	◎	談話7	CC	女	◎	1年6か月	4年	N1
	JD	男			CD	女		1年6か月	4年	N2
談話3	JE	女	△	談話8	CE	男	△	1年6か月	4年	不明
	JF	女			CF	男		1年6か月	3年	不明
談話4	JG	女	◎	談話9	CG	女	◎	1年6か月	3年	N1
	JH	女			CH	女		1年	3年	N1
談話5	JI	女	○	談話10	CI	男	○	1年	3年	N1
	JJ	女			CJ	女		1年6か月	4年	N1

調査協力者の概要は〈表1〉の通りである。CSの日本語能力試験の合格級はN1が5名、N2が1名である。他の4名については不明だが、調査協力依頼時の会話から中級以上のレベルであると判断された。よって、CSの10名は日本語中上級レベルの学習者集団として扱うことができよう。

4. 「勘違い」のロールプレイにおける談話分析

4-1 「談話」分析に用いられる用語について

談話分析の研究における用語の定義は定まったものがない。宇佐美(2009:142)は、言語学分野における「談話」の定義について、「談話」とそれに関する「談話分析」「会話分析」の用語は専門家の間でも様々に異なる用いられ方をしていることを述べ、言語学的定義としては「意味的なまとまりを持った2つ以上の文(発話)を指す」とするのが「無難であろう」としている。日本語教育分野における用語としての「談話」は高見澤(1997)が初学者向けの用語事典で「文より大きい言語単位であり、何らかのコミュニケーションの意図を持ってなされたひとまとまりの発話の集合単位」と定義している。つまり、コミュニケーション上の「意図」や「意味」を有し、2つ以上の発話からなる「一つのまとまり」を持った発話の集合体と捉えることができる。

「談話」の構造を語る時、ザトラウスキー(1993)は「談話」の下位単位として「話段」という用語を提案し、分析を行っている。「談話」の全体的な構造と局部的な仕組みについて、「従来の会話分析で『会話の構成単位』として認められるものは(略)『ターン(turn)』・『応答ペア』・『先行発話連鎖』等の局部的な単位か、『開始部』・『話題の連鎖』・『終了部』等のかかなり上位の大きい単位のみであり、その中間的な段階の単位については、従来のCA(Communicative Approach 筆者加筆)ではとりあげていない」とし、続けて、中間的な単位として「話段」という単位の必要性について述べている。(同書:38-39)さらに、「談話」・「話段」・「発話」の相互関係については「『発話』等の小さい単位がつながって、会話の展開を支える中間的な段階の『話段』という単位を形成し、それらの中間的なまとまりがいくつか集まって、『開始部』・『話題の連鎖』・『終了部』を構成していく」としている。また、【注】では、「話段」は「コミュニケーションの過程を含む動的な単位である」ので、従来の言語単位のようにその大きさが一定していないこと、また「『話段』はその内部にさらに小さい『話段』が存在したり、いくつかの『話段』が一緒になって、さらに大きい『話段』を構成したりすると考えられる」(同書:85)と述べている。

本稿では、上述したザトラウスキーの「話段」の概念と用語を分析に用いたい。また、本稿での談話分析の対象は「ロールプレイによる電話での会話」であるが、ザトラウスキー(1993:50)が「1回の電話の会話の全体構造を『開始部』・『主要部』・『終了部』という3部分に区分することが適当ではないか」としているのに倣うことにする。まず、各会話を大きく3部分に区分し、その「主要部」について、さらに下位単位の「話段」に分類する。今回は、その中の「謝罪」と「謝罪」に関わる「話段」の分析を試み、主にJSとCSの談話構成と言語行動の異同を検討する。

4-2 「勘違い」のロールプレイにおける談話の構成

JS同士のペア5組の【談話1】～【談話5】とCS同士のペア5組の【談話6】～【談話10】の計10例の各発話数と話段の構成（会話の展開）を<表2>に示す。

<表2> 「勘違い」の談話における発話回数・所要時間と「話段」の構成

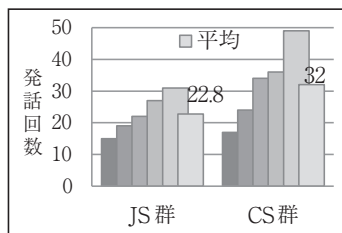
談話No. 発話者	発話回数 所要時間 (秒)	会話の展開と発話番号 表記例：開始(1,2)は「開始の話段」(発話番号1、発話番号2)を示す
談話1 JA,JB	19 64"	開始(1,2)→経緯の確認と応答(3~10)→責任承認と謝罪1(11-12)→次回の約束(13-14)→勘違いの解決法(15,16)→謝罪2(17-18)→終了(18,19)
談話2 JC,JD	27 55"	開始(1,2)→先行発話と応答(3-6)→経緯の確認と応答(7-14)→責任承認・謝罪1(15-18)→解決法(19,20)→謝罪2(21,22)→終了(22-27)
談話3 JE,JF	15 61"	開始(1,2)→叱責(3)→経緯の確認と応答(4-10)→勘違いに気付く(11,12)→次回の約束(13-15) 責任承認の
談話4 JG,JH	22 41"	開始(1,2)→叱責(3,4)→経緯の確認と応答(5-9)→責任承認・謝罪1(10-16)→次回の約束(16-19)→終了(20-22)
談話5 JI,JI	31 82"	開始(1,2)→状況確認・状況説明(3~9)→勘違いに気付く(10)→経緯の確認と応答1(11-14)→謝罪1(15)→経緯の確認と応答2(16~21)→謝罪2(22-27)→終了(28~30)
JSの 平均	22.8 64"	・会話1, 2, 4, 5における謝罪1出現の発話箇所 24.8発話回数中の13.5番目の発話箇所 談話全体の中盤(54.4%)
談話6 CA,CB	36 116"	開始(1-4)→叱責・状況説明(5-9)→場所確認・応答(10,11)→経緯の確認と応答(12-21)→勘違いに気付く(22,23)→次回の約束(24-27)→感想(27-34)→謝罪(35,36) 終了挨拶の
談話7 CC,CD	49 127"	開始(1,2)→叱責・応答(3-5)→経緯の確認・応答(6-9)→叱責・状況説明(10-12)→経緯の確認・応答(13-35)→勘違いに気付く(36)→謝罪1(37-40)→次回の約束(41-47)→終了(48,49)
談話8 CE,CF	24 70"	叱責・応答(1-3)→経緯の確認と応答1(4-14)→勘違いに気付く(14)→責任所在(15-17)→経緯の確認・応答2(18,19)→謝罪1・責任承認(20-22)→終了(22-24) 開始の呼びかけの
談話9 CG,CH	34 90"	開始部(1-6)→先行発話と応答(7-9)→経緯の確認と応答(10-26)→勘違いに気付く(27)→事情把握(27)→責任承認と対処(28)→謝罪1・応答(29,30)→終了(31-34)
談話10 CICJ	17 78"	開始(1)→経緯の確認・応答(1-7)→解決策(8,9)→次回の約束(10-16)→終了(17)
CSの 平均	32.0 96"	・会話6, 7, 8, 9における謝罪1出現の発話箇所 35.8発話回数中の30.3番目の発話箇所 談話全体の終盤(84.6%)

なお、本稿での「発話回数」は1人の発話が相手の発話または笑い声、ポーズなどによって途切れる直前までを1発話として数えた。したがって、1人が2つ以上の事柄を続けて話してもこれらの指標がない限り、1発話とした。

4-2-1 発話回数の比較

まず、談話資料全体の発話数について比較を行う。

談話の開始から終了までの発話回数はJSグループ（以下、JS群）では【談話3】の最少15回から【談話5】の最多31回であり、平均発話回数は22.8回であった。一方、CSグループ（以下、CS群）では【談話10】の最少17回から【談話7】の最多49回で、平均発話回数は32回であった。CS群はJS群に比べて約1.4倍の発話を行って会話を終了していた。



<図1> 発話回数の比較

4-2-2 「謝罪の話段」の出現数について

本稿での「謝罪の話段」とは「申し訳ありません」「すみません」「ごめん」「悪かった」などの「謝罪表現」を含む発話の一まとまりを言う。

JS群では談話の4例に「謝罪の話段」が見られ、その出現数は6回であった。これは、2例の談話に「謝罪の話段」が2回ずつ出現していたことによる。一方、CS群では談話の4例に「謝罪の話段」が見られ、その出現数は4回であった。「謝罪の話段」は1談話に1話段であり、2回出現している談話例はなかった。

「謝罪の話段」に関しては、JS群はCS群の1.5倍の出現が見られた。

4-2-3 「謝罪表現」の初出位置

<表3>は謝罪の意味を有する言語表現「すみませんでした」「悪かったね」「ごめん」等が各談話に初出した発話箇所を示したものである。表中の「進行率」とは、談話の開始から終了までの全体を1として、「謝罪表現」の初出がその流れの中のどの程度進んだ位置で出現したかを%で示したものである。

<表3> 「謝罪表現」の初出位置

JS群	談話1	談話2	談話4	談話5	平均
総発話回数	19	27	22	31	24.8
初出發話No.	11	17	11	15	13.5
進行率 (%)	57.9	63.0	50.0	48.4	54.4
CS群	談話6	談話7	談話8	談話9	平均
総発話回数	36	49	24	34	35.8
初出發話No.	35	37	20	29	30.3
進行率 (%)	97.2	75.5	83.3	85.3	84.6

JS群で「謝罪表現」が見られた4例の談話の発話回数の平均は24.8回であり、初出はその中の13.5回目の発話箇所に見られた。これは会話の流れの中盤（54.4%）で謝罪が行われていたことを示している。最も早く出現した例は【談話5】の進行率48.4%の時点であり、勘違いに気付いた直後に謝罪表現を口にしている。

一方、CS群で「謝罪表現」が見られた4例の談話の平均発話回数は35.8回であり、初出の発話箇所はその中の30.3回目の位置であった（注2）。これは談話のほぼ終盤（84.6%）で初めて「謝罪」が行われたことを示している。最も遅く出現した例は【談話6】の進行率97.2%の位置であり、謝罪表現「すみませんね」に対する「はい、だいじょうぶです」で会話が終了するという談話構成であった。

ここで、JS群とCS群の「謝罪」に至るまでの談話構成の特徴を見ると、「確認・応答・説明」

に関わる発話回数の割合に差異が認められ、それが「謝罪表現」の初出位置に影響を与えていることが分かる。

JS群の4つの談話例では、互いの待ち合わせ時刻や場所、待っていた時間などの確認や説明を行う「経緯の説明」（＜表2＞では「経緯の確認と応答」、「状況確認・状況説明」とした部分）に要した発話回数は平均総発話回数24.8回中の7.8回であり、この部分が発話全体の31.5%を占めていた。一方、CS群では「経緯の説明」が平均総発話回数35.8回中の19.8回を要し、全体の55.3%を占めた。つまり、「経緯の説明」の発話部分が平均総発話数に占める割合はJS群が31.4%、CS群が55.3%であり、CS群はJS群の約1.8倍であった。

CSは、謝罪の言語行動に至るまでに、事実関係を明らかにすべくJSより多くの割合の発話回数でコミュニケーションを図っており、その結果、謝罪の言語行動がJSに比べて遅くなる傾向が観察された。

4-3 「謝罪表現」についての分析

「謝罪の話段」に見られた「謝罪表現」とその出現数を＜表4＞に示し、分析を行う。

＜表4＞ 「謝罪表現」と出現数（左端は談話No.を示す）

No.	発話者	謝罪表現が出現した発話番号と「謝罪表現」	出現数	小計	
1	JA	11「すみません」、11「すみませんでした」、17「すみませんでした」	3	20	
	JB	12「申し訳ございませんでした」	1		
2	JC	17「ごめん」、21「悪かったね」	2		
4	JG	11、13「ごめんね」	2		
	JH	10、14「ごめん」、12、16「ごめんね」	4		
5	J I	15「ごーめん」、17、19「ごめん」、23「ごめーん」、15、25「ごめんごめん」、27「ごめんね」	7		
	J J	28「ごめん」	1		
6	CB	35「すみませんね」	1		7
7	CC	37、39「すみませんね」	2		
8	CF	20、20、22「すみません」	3		
9	CG	29「なんかごめんなさいね」	1		

JS群では「ごめんなさい」系15例、「すみません」系3例、「申し訳ありません」系1例、「悪かった」系1例と、4種類の謝罪表現が延べ20例観察された。一方、CS群では「すみません」系6例と「ごめんなさい」系1例の2種類の謝罪表現が延べ7例あった。

JS群で最も多く出現した「ごめん」は謝罪の口語表現「ごめんなさい」のくだけた表現であり、日本人の友人関係では一般的な表現である。しかし、CS群では【談話9】におけるCGの1例を除き、他は「すみません」の使用に固定していた。

4-3-1 JS群における「謝罪表現」の分析

JS群の「謝罪の話段」における「謝罪表現」は【談話1】、【談話2】、【談話4】、【談話5】で以下のように見られている。なお、話段例における行頭の文字・記号は（注1）に示した。

《話段例1》

- 1-11JA : そうですね。すいません、もしこっちはメモもたぶん取ってなかったりしたんで、間違えてたと思います。何か迷惑をかけてしまって、すいませんでした。
- 1-12JB : いいえ、こちらこそ連絡をしないでしまって、そのまま帰ってしまったので、申し訳ございませんでした。

《話段例1》の男女ペアは親しくはない知人であったためか、丁寧体で発話がなされている。1-11JAではまず、メモを取っていなかったことから行き違いが生じた事態に対し、自己の過ちを認めて「すいません」と定型表現で謝罪を行い、「迷惑をかけてしまって、すいませんでした」と再謝罪を行っている。前者は自己の過ちを認める「対自己罪意識」、後者は他者に迷惑をかけたことに対する「対他者罪意識」からの謝罪表現と言える。(注3)

この発話に対し、1-12JBはまず、「いいえ」と迷惑をかけられたことを「否定」する形で応答し、続けて、「連絡をしないでしまって、帰ってしまって」と自己の過失が行き違いの原因であるかのような表現で「こちらこそ(略)申し訳ございませんでした」と「対自己罪意識」からの謝罪をしている。なお、「すみません」「いいえ、こちらこそ…(謝罪表現)」の隣接ペアは他の談話例には見られなかった。

《話段例2》

- 2-15JC : じゃあ おれが時間間違えちゃって勝手に待ってただけだったんだ。
- 2-16JD : [笑い]
- 2-17JC : [笑い] ごめん、おれはちょっと勘違いして怒ってしまった。
- 2-18JD : あーだいじょぶだいじょぶ(うん)、おれも何か怒ってたけど、誤解が解けてよかった。
- 2-19JC : あ、そう。(あん) 今度からちょっとこまめに連絡するわ。
- 2-20JD : うん、じゃあ。
- 2-21JC : 悪かったね。
- 2-22JD : うん、だいじょぶ、だいじょぶ、じゃあ また今度。

2-17JCの「ごめん」は自分の過ちに気付いての謝罪表現である。2度目の21JC「悪かったね」は、相手を待たせたこと、怒らせたことに対しての謝罪表現である。JCは「対自己罪意識」を「ごめん」、「対他者罪意識」を「悪かったね」と表現を使い分けている。

《話段例3》

- 4-9 JG : (略) 1時間待ったんだけど、来なかったんだよ。
- 4-10JH : えっ。(間) マジか、あれ、ずっと間違えてた。ごめん。(謝罪)
- 4-11JG : ねえ ごめんね／／したら…
- 4-12JH : ねえ ごめんね。(謝罪)
- 4-13JG : ごめん。

- 4-14JH: いやー、ごめん。|笑い| (謝罪)
 4-15JG: |笑い| どこで間違えたんだろうね。
 4-16JH: ごめんね。じゃあ また会おうね。 (謝罪)

《話段例3》の「謝罪表現」6例中、4例は「対自己罪意識」からの「謝罪」である。まず、責任の所在は10JH「あれ、ずっと間違えてた」で見られるようにJHとされており、これに続く「ごめん」は「対自己罪意識」の謝罪表現である。しかし、ペアの相手である責任所在のないJGにも4-11JG、4-13JG、4-15JGで「ねえ ごめんね//したら」、「ごめん」、「どこで間違えたんだろうね」と一連の発話中に「ごめん」が2回出現している。責任の所在がないJGの4-11JG「ねえ ごめんね」は「発話交替」を要求する用法だと考えられる。まず、注意喚起のために「ねえ」と呼びかけ、続けて「ごめんね」で「あなたの発話にこれから割り込む」失礼に対する「対他者罪意識」を含む前置きと考えられる。次の4-13JG「ごめん」も相手4-12JHの2回目の謝罪を遮るように用いられている。この「(ねえ) ごめん (ね)」は親しい間柄のコミュニケーションで用いられる「割り込み」を予測させる発話機能があると言える。

【談話5】においては「謝罪の話段」と「経緯の確認・応答の話段」も含めた17発話中に、「ごめん」が8回出現している。紙幅の都合上その全記載は省くが、「勘違い」から生じた事態に対する「謝罪」であると分かるのは責任の所在を有するJIの発話にある4例であった。5-15JI「ごーめん。」、5-23JI「ごめーん。」、5-25JI「ごめんごめん。」、5-27JI「じゃあ ごめんね。」と「ごめん」の4つのバリエーションが延べ4回出現している。

残る4例中の3例については《話段例4》の二重下線の部分に示して検討する。

《話段例4》

- 5-14JJ: ええー ちょっー 1時間も違うじゃん |笑い|。
 5-15JI: ごーめん 。あれっ、どっちだっけ正しいの、ごめんごめん。
 5-16JJ: けど、待って? (うん)、一応見てみるね? (うん)。えっーとね? (うん)、わたしの手帳2時って書いてあるよ?
 5-17JI: うそ、ごめん、こっち3時って書いてある。
 5-18JJ: どっちだよ |笑い|。
 5-19JI: |笑い| えっ、じゃあ ごめん、どのぐらい待ったー。
 5-20JJ: 40分ぐらい。

5-15-JI「あれっ、どっちだっけ、正しいの、ごめんごめん」はJIに「どちらが正しいのか」と質問すること(質問要求)で相手に負担をかけるという「対他者罪意識」からの比較的軽い「謝罪」と考えられる。さらに、5-19JI「(略) じゃあ ごめん、どのぐらい待ったー。」も同様に「対他者罪意識」から予め行った比較的軽い「謝罪」とみられる。

5-17JI「うそ、ごめん、こっち3時って書いてある。」の「ごめん」は「自己の過失」や「相手に迷惑をかけたこと」を詫げる本来の「謝罪」とも異なる。それは、「私の手帳に3時と書

いてある」の発話は相手との記述の食い違いを述べているので、経緯説明に当たる。ここでは「あなたの方は2時と書いてあるが、それと違い、私の方は3時と書いてある」という事実確認になる。このように相手の発話内容を否定することは、相手の面子を潰すことになる可能性があることから、「対他者罪意識」の「謝罪表現」を前置きして用いたと考えられる。

残り1例の5-28JJ「ごめん」は熊谷(2013)の言う「潤滑油的な謝罪」の例であり、25JI「(略)じゃあ また今度(うん)行くってことで。」→26JJ「うん、そうだね。」→27JI「じゃあ ごめんね。」→28JJ「ごめん。」→29JI「じゃ、またね。」→30JJ「は—/—い。」と終結に向かって用いられている。

熊谷(2013:34)は「本来の謝罪」の応答は「許し(あるいは拒絶)」であるが、「潤滑油的な謝罪の場合は同じく謝罪を返すことが適切な応答となる」とし、挨拶—挨拶の隣接ペアになぞらえることができるとしている。この28JJ「ごめん。」も謝罪の意味がない、隣接ペアの「潤滑油的な応答表現」と位置付けられる。

4-3-2 CS群における「謝罪表現」の分析

CS群の「謝罪表現」は【談話6】、【談話7】、【談話8】に見られた。

《話段例5》

6-32CA：あたしも家に帰ったあとは、腹減ったよ。

6-33CB：[笑い]

6-34CA：[笑い] ずっと1時間待ってますから。

6-35CB：そうですか。(はい) すみませんね。

6-36CA：はい、だいじょうぶです。

6-35CBの「すみません」はCBが空腹で1時間待ったことへの「謝罪」であり、「勘違い」についての直接の「謝罪」ではない。結局この【談話6】は責任所在を明らかにしての謝罪がないままで、6-35CBの「すみませんね」に応答する6-36CAの「はい、だいじょうぶです」の隣接ペアで会話を終了させている。

《話段例6》

7-37CC：あつ、わたし?(笑い) いや だれが時間間違えました。分からないけど。まあ—
すみませんね。

7-38CD：いいや、//だいじょうぶ。

7-39CC：すみませんね。 3時に//行きましたけど、

7-40CD：だいじょうぶ。

《話段例6》において、CCは2回の「謝罪」の定型表現「すみません」を用いて「勘違い」に対する謝罪を行っており、これに対応してCDは「許し」の「だいじょうぶ」で応答している。ここには「すみません」「だいじょうぶ」の「謝罪・許し」の隣接ペアが見られている。

《話段例7》

8-20CF: じゃあ、じゃあ、すみません、わたしのせいですね。覚えてないです。すみません。

8-21CE: うーん。

8-22CF: [すみません。]じゃあ また連絡するよ。

8-23CE: うん、(うん) じゃあ 今度— / 覚えててね。

8-24CF: 今度 () はいはいはい。

8-20CFでは「対自己罪意識」からの謝罪表現が2回出現している。この謝罪に対して8-21CEは「うーん」というくだけた形の肯定応答詞のみである。これと同時に8-22CFは再度「すみません」と謝罪表現をし、続けて、「また連絡するよ」と次回接触を予期させる言語行動で談話を終結に向けている。

【談話9】においては9-29CG「なんかごめんなさいね。」という「謝罪表現」は見られたが、「勘違い」に対する謝罪ではなく、相手のCHが手帳を確認することに対して用いられた「対他者罪意識」からの謝罪である。この談話例では「勘違い」に対する謝罪行動は見られなかった。

5. まとめと考察

日本人学生5組と中国人留学生5組の「謝罪」の言語行動について、ロールプレイで得られた談話資料を基に「謝罪表現」の分析を行ってきたが、その特徴を<表5>にまとめる。

<表5> 「謝罪の話段」における日中の言語行動の比較

	項目	JS群	CS群
1	各談話の総発話回数の平均	22.8回	32.0回
2	「謝罪の話段」の出現数	4談話で6話段	4談話で4話段
3	「謝罪表現」の初出位置	談話進行率54.4%の位置	談話進行率84.6%の位置
4	「経緯の説明」発話数の割合	31.5%	55.3%
5	「謝罪表現」の出現数と種類	全20例 「ごめん」系 15例 「すみません」系 3例 「申し訳ありません」系 1例 「悪かった」系 1例	全7例 「ごめん」系 1例 「すみません」系 6例
6	「勘違いに対する謝罪」以外の発話機能と主な表現	①前置き:「すみません」 1例 ②割り込み:「(ねえ) ごめん」 2例 ③軽い謝罪:「ごめんね」等 5例 a. 質問・確認 b. 相手発話の否定 ④潤滑油的応答:「ごめん」 1例	①軽い謝罪: 1例 「なんかごめんなさいね」 ②終了の挨拶: 1例 「はい、すみません」

「謝罪の話段」と「謝罪表現」は、JS群が6話段で16例、CS群は4話段で7例であった。JS

群では1つの談話において「謝罪の語段」が2回出現するペアが2組あったが、CS群では見られなかった。また、「謝罪表現」はJS群で20例が出現し、CS群7例の2.9倍であった。この結果はBrown & Levinson (1987) の言う、日本人は他言語の話者に比べて謝罪を頻繁に行うことや、鄭 (2006) 「日本人は謝罪行為において、何度も謝罪の慣用表現を口にする」など、多くの先行研究で指摘された日本語コミュニケーションの特徴が確認された。

なお、JS群ではこの20例中「勘違いに対する謝罪」以外の「自己の発話が相手に負担を強いると考える」ことによる「謝罪表現」9例が占める割合は45.0%であり、人間関係維持に配慮するJSの言語行動が特徴として観察された。

「謝罪表現」の初出位置についてはJS群では談話の中程で出現していたのに対し、CS群では終了に近い位置であった。この結果は、巷で「すぐに謝る日本人」「なかなか謝らない中国人」といわれる現象が本研究のロールプレイにおいても確認されたと言える。

この「謝罪表現」の初出位置の相違の要因は謝罪の前の「経緯の説明」に要する発話回数の割合の差異にあった。JS群が発話全体の3割強を「経緯の説明」に要していたのに対し、CS群ではその1.8倍であった。日本企業関係者が「相手は理屈や言い訳ばかり言って」と感じていた所以はこのような点にあったのであろう。また、曲・林 (2000) は、中国人の表現の特徴は「弁明」であるとしている。「弁明」とは『デジタル大辞泉』によると「事情などを説明してはっきりさせること」である。本調査協力者であるCSは互いに「経緯の説明」を行って事実関係をはっきりさせてから謝罪をする、またはしないという自文化のコミュニケーションのルールをもとに言語運用を行っていた。一方、JSも「人間関係をスムーズにするためには自分の過失をすぐにわびて、相手の感情を害さないことが大切」(樋口2007) だとする日本文化の一端を示した結果となった。

「謝罪表現」の言語形式についてはロールプレイの設定が友人同士の会話ということからJS群では「ごめん」系の出現が15例(出現率が75%)と顕著であったが、CS群においては「すみません」系が3例と最多であった。「すみません」系の謝罪表現では友人同士のくだけた会話にはなりにくく、よそよそしい感じが残った。

「勘違いに対する謝罪」以外の「謝罪表現」の用例はJS群においては全20例中の9例(45%)であった。

発話機能について、「前置き」の例はJSの【談話1】で親しくはない知人同士で見られた。1-13JA「すみません、じゃあ またあしたとか待ち合わせできますか?」と「依頼表現」を後接する形で用いられていた。

「割り込み」の機能は4-11JG「ねえ、ごめん」と4-13JG「ごめん」に観察された。『日本国語大辞典 第2版』によると、「ごめんなさい」は「許しを請うときにいう言葉」とされ、その第3義に「特に、人込みに分けいったり、それをかき分けて進む時のことば」と解説されている。言語行動における「割り込み」の用法も「相手の発話に分け入って自己の発話権を主張する」イメージが共通している。

「軽い謝罪」と見做した発話例は【談話4】【談話5】で「ごめん」系に見られた。「軽い謝罪」の「ごめん」は本来の「謝罪」とは異なる様相を見せており、「質問要求」「相手の発話の否定」「確認要求」等、自己の発話が相手に何らかの不利益(負担)をもたらしそうな場面での発話

に付随して、多くは前置きとして出現していた。これを「対他者罪意識」の「前触れ」としての「ごめん」と括れる可能性も考えられる。また、「軽い謝罪」はいずれも女性の発話に見られたことから、ジェンダーの視点からの検討も課題として残る。

本調査で得られた結果は、対象者が20名と少数のために一般化はできないが、従来の日中対照「謝罪」研究の成果の一部が確認できた。今後は対象者をさらに増やし、日本人と中国人のペアでは談話の構成や「謝罪表現」に差が生じるか否か、また、男女による差異は存在するか等について検討する必要があるだろう。

注

(1) 《話段例》に用いた記号は以下のことを意味する。

・ 例文先頭の数字と記号は、「談話番号－発話番号・発話者」を示す。

1-2JAは【談話1】における発話番号2で発話者はJA

- ・「／／」：相手の割り込みがあった場所
- ・「一」：音を延ばす
- ・「。」：長い息継ぎ
- ・「(間)」：発話中に見られた少し短いポーズ
- ・「[[」：同時発話
- ・「()」：聞き取りにくい発話
- ・「{笑}」：非言語的な行動の「笑い」
- ・「、」：短い息継ぎ
- ・「?」：上昇イントネーション
- ・「…」：言いさし
- ・相手の発話に重なる短いあいづちは「(うん)」のように()内に示す。

(2) 【談話10】にも「はい、すいません」が出現しているが「謝罪」の意味を持たない「別れのあいさつ」表現であったことから、「謝罪の意味を有する表現」の集計には含めなかった。

(3) 鄭・上原(2005:115)が「罪意識」と「謝る意識」には相関関係があると述べる中で、「自分が悪かった」とする意識を「自己罪意識」、「相手に迷惑をかけた」とする意識を「他者罪意識」としているが、本稿では対者関係をより明確にするため「対自己罪意識」「対他者罪意識」とした。

【参考文献】

- 宇佐美まゆみ(2009)「書評 泉子・K・メイナード著『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』」『日本語の研究』第5巻3号
NII-Electronic Library Surevice
- 王源(2009)「日中における謝罪言語行動の対照研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第12巻 pp.223-236
- 曲志強・林伸一(1998)「文化的要素を重視する日本語学習—日本語と中国語の表現差異に着目して—」『教育学研究紀要』第44巻第二部、中国四国教育学会 pp.404-409
- 熊谷智子(2013)「日本語の『謝罪』をめぐるフェイスワーク—言語行動の対象研究から—」『東京女子大学比較文化研究所紀要』74 pp.21-36 NII-Electronic Library Surevice
- 鄭加禎・上原麻子(2005)「謝る意識—中国人、日本人、台湾人の対照研究」*Human Communication Studies Vol.33* 日本語コミュニケーション学会 pp.99-119

NII-Electronic Library Surevice

鄭加禎 (2006) 「謝罪行為における差異—日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究」『アジア、社会文化研究』7号

末田美香子 (2015) 「誤解や外的要因に基づくいわれのない非難に対する言語行動—日本人社会人・日本人学生・留学生の比較から—」『文学部紀要』文教大学文学部28-2号

NII-Electronic Library Surevice

泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版

高橋優子 (2012) 「これまでの日中の「謝罪」表現研究の問題点と今後の課題」『文化外国語専門学校紀要25号』pp.1-8 <http://dspace.bunka.ac.jp/dspace>

高見澤猛監修 (1997) 『はじめての日本語教育 [基本用語事典]』アスク

滝浦真人・大橋理枝 (2015) 『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会

樋口清之 (2007) 『日本の風俗 起源がよくわかる本』大和書房

平田真美 (1998) 「日本語における『陳謝』—陳謝する側と受け手の関係を中心に」『横浜国立大学留学生センター紀要』5号 NII-Electronic Library Surevice

堀内純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版

ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版

山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アルク

Brown. P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

【参考辞書類】

『デジタル大辞泉』小学館 (2013)

日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2001) 『日本国語大辞典 第2版』第8巻

付記 本研究の資料収集と整理については元留学生の張姪楠さんの協力を得て行いました。

(にのみや・きよこ)